



小澤洋介、三戸素子、P. ヤング友の会ニュース

2001年12月3日発行 No.31

友の会の皆様、大変お待たせいたしました。12月7日の小澤洋介チェロリサイタルが目前となりましたが、前号の友の会ニュースが出た8月末からこの間、3つのイベントがありました。

10月6日に八ヶ岳で行われた「小澤洋介チェロの世界」は2年目となり、今回はトークも交えた聴衆との一体感のある、趣のある演奏会に発展していました。そして10月25日～27日のクライネス・コンツェルトハウス「メキシコ公演」には、この秋よりクライネス・コンツェルトハウス事務局長に就任した本野義雄氏も同行し、その模様をこの紙面でお伝え下さいます。また11月にはフィリップも来日し、秋恒例のサンクト・フローリアン三重奏団、骨髄バンクキャンペーンコンサートが行われ、さっそく外谷さんがそのレポートを送って下さいました。

メキシコ演奏旅行報告 クライネス・コンツェルトハウス 友の会会員 本野義雄

「太陽の国」というキャッチフレーズにふさわしく、メキシコの陽射しは強烈で、空はぬけるように蒼い。今回クライネス・コンツェルトハウスが招かれたのは、北西部にあるシナロア州の芸術祭。10月24日朝、州都クリアカンの空港に着くと、うら若い魅力的な女性が近づいて来て、「シナロアへようこそ」とにっこり迎えてくれた。私たち(本野、神谷)は、クライネス・コンツェルトハウス事務局代表ということで、出演者と同じ待遇を受ける栄に浴したわけである。

車の中で、セシーリアと名乗る彼女にいろいろ訊いてみた。クリアカンは、100万の人口を擁する大都市で、農業と漁業の集散地。州の芸術祭を開くのはこれが3回目だが、こうした芸術祭はメキシコ全国の各州で行われている(ちなみに、メキシコは合州国なのだ!)。貧富の差ゆえの犯罪や政治腐敗など芳しくない

話題ばかり多いこの国だが、政府や自治体が文化の保護育成にかなり力を入れていることは、今回各地を回って見て強く印象づけられた。

オテル・ルセルナは最高級ホテル。洋介さんと素子さんは2日前から、他の皆さんは前日に到着して、リハーサルもすんでいる。皆の元気な顔を見てひと安心。99年からクライネス・コンツェルトハウスに参加している山梨県在住のピアニストのラファエル・ゲーラさんがこのクリアカン出身で、今回の音楽祭招待のお膳立てを何から何まで調べてくれた。彼にとっては7年ぶりの帰郷だそうだ。

ホテルの特別室「真珠の間」で、地元テレビ・新聞による記者会見。ラファエルさんがメンバー一人一人を紹介し、今回演奏する曲目、特に西澤健一さんがこの公演のために書き下ろした

新作について、詳しく説明した。面白かったのは、素子さんに「日本では女性の演奏家は珍しいか」という質問があり、「珍しいどころか、多すぎるくらい。音楽大学の学生の多くは女性」という答えにびっくりしていたこと。やはりここはマチスモの国なのだろうか。

さて、シナロア芸術祭は州内8ヶ所で10日間にわたり開かれ、オペラ、小オーケストラ、ジャズバンドの上演から、オペラアリア、ブルース&ゴスペル、トローバ、ギター独奏、演劇、人形劇、美術展に至るまで多彩なプログラムがあったが、最大の催し物はメキシコ人歌手によるオペラ「蝶々夫人」とわがクライネス。入場料は「蝶々夫人」の250ペソに対してこちらは300ペソ(約3600円)という高さ。ちなみに300ペソは、当地ではワインつきフルコースの食事代に相当する。なぜかプログラム、

チラシ、新聞広告に至るまで、クライネスのSが抜け落ちてクライネ・コンツェルトハウス(劇場正面に張り出された横断幕にはさらに「e」も落ちてクライネ)になってしまっていたが、これも細かいことは気にしない国のご愛嬌。プログラムの「蝶々夫人」のページにでかでかと蛾の写りが掲げられていたのを見れば、これぐらいは何でもない。

地元出身の演出家の名前を冠したというビジャ・ピセンシオ劇場は、約1000人収容の演劇用ホールで、1階より2階のほうが広い。夕方のゲネプロで、ラファエルさんが座る椅子が高すぎるというのでひと騒動。ついには劇場のスタッフが椅子の足をノコギリでゴシゴシ切ることになり、さらにはペンキで黒く塗るというおまけも。この国の習慣として、開演は午後8時半から。30分ぐらい前から、ぼつぼつお客が集まり始める。服装や

しゃべり方などから察するに、地元の上流階級や知識人が中心のざっと350人。席指定はあってないようなもので、2階の客は1階が空いているのを見て、どんどん下に降りてきた。いよいよ開演、モーツァルトのK458「狩」四重奏曲の優美なメロディが流れ始めると、最前列に陣取ったカメラマンたちがいっせいにフラッシュの嵐。見回すと、観衆の誰ひとり気にしている風もない。カメラマンたちはその後も平然と音を立ててシャッターを切りまくる。中にはポケット型のテープレコーダを舞台の床に置く奴も。それどころか、どうも後ろの方でぼそぼそ声があると聞いたら、演奏中に携帯で話しているおじさんがいるのを発見してしまった!しかし、われらが4人はすこしもめげずに好演、観衆も1楽章ごとに拍手を送って応えていた。モーツァルトとメキシコの取り合わせはどうか、などと考えるのは余計

な心配だったようだ。続く西澤健一さんの「7つの楽器のための室内シンフォニー」では、現代音楽だからと身構えるところは微塵もなく、モーツァルトを聴くのと全く同じように楽しんでいるように見えた。特に第2楽章で有名なメキシコ民謡の主題が現われる箇所では、はっきり反応があった。それにしてもこの曲は、それぞれの楽器の特色を生かしながら、みごとに統一した緻密な世界を造り上げている力作だと思った。ホルンの藤田さん、クラリネットの山根さんも熱演。ぜひ日本で再演して貰いたいと思う。最後のドホナーニ「ピアノ6重奏曲」は、何ともロマンチックな曲で、楽しい。6人ともものびのびと、リラックスして弾いているようだった。相変わらず1楽章ごとの拍手。終楽章のコーダでは作曲者のいたずらに引っかかり、終わらないうちに大きな拍手。

アンコールはメキシコの国民的作曲家マヌエル・ボンセの「エストレジータ」をラファエルさんが七重奏用に編曲したものの。誰でも知っているメロディーに、皆大喜びだった。終演後、深夜からラファエルさんのいとこのお宅で、盛大な歓迎パーティ。練りたてのトルティージャにさまざまな具をはさんだタコス、何とも珍妙な味の握り寿司、ブランディにも勝る深い味わいのテキーラ古酒など、たらふくご馳走になった。

翌25日の演奏会は、前日と同じ場所。お客も少しふえて400人ぐらい。この日はラファエルさんの親戚や友人が多かったのと、演奏がいっそう充実したこともあって、ブラヴォーの声は何度もくりかえされた。ラファエルさんはアンコールで、ボンセのまるでショパンのマズルカのような小品を披露。最後はやはり7人全員の「エストレジータ」で締めくくった。この夜は州知事夫人主催の晩餐会に招かれる。知事邸に着いたのはもう11時半をまわっていたが、それからたっぷり2時間かけてフルコースの食事。しかし、ひそかに恐れていたテーブルスピーチの必要もなく、準備していた草稿はむだになったものの、大いにほっとした。

3日目は専用バスで2時間あまり、150キロ南の港町マサトランへ。ここはマグロなどの漁業基地であると共に、メキシコ有数のリゾート地として、アメリカ人観光客に人気が高い。海辺に面したすばらしいホテル、岬の突端にあるシーフードレストランで食べたエビやカキ、シイラのステーキの味は忘れがたい。演奏会場は、これも地元出身の世界的オペラ歌手の名にちなんだアンヘラ・ペラルタ劇場。ミラノ・スカラ座などと同じように、周りに桟敷を配した4階建て円形劇場で、音響も申し分ない。聴衆は約400人、こちらが慣れたせいか、お客のマナーも気にならなかった。演奏は、3晩続けて聴くと着実によくなっているを感じる。拍手も熱烈で、最後はスタンディング・オベーションと、まるでロック歌手なみ。素子さんがもらった巨大な花束は、横に延々と連なって持ち切れず、床に置くしかなかった。

終演後は、地元在住日本人の吉井さんご夫妻が食事に招いてくださり、ここでも暖かいもてなしを受けた。滞在中、ずっとわれわれに付き添ってくれたボディガードのトレド大尉には、感謝に耐えなかった。

第10回 骨髓バンク・キャンペーン、 サクト・フローリアン三重奏団

11月8日東京、9日千葉、10日埼玉、11日福島

「今年も大成功のチャリティコンサート」 友の会会員 外谷千春

11月10日、北浦和パーミン・ダイゴウで行われた「骨髓バンクチャリティコンサートーピアノ三重奏の夕べ」は、今年も大盛況のうちに幕を閉じました。

- ・「素晴らしいコンサート。子供たちも楽器に興味を持ったようで、弦をはねらせるところなど気に入ったともらしていました。曲の解説があると、目線が変わってくるものですね。(常連のSさん親子)
- ・「日本ではなかなか現代音楽が受け入れられないのに、西澤さんの曲は凄い!(ダンス教師Yさん)
- ・「初めての”ピアノ三重奏”の演奏を聴き、身体の芯まで響く音色に、時が経つのも全く気が付きませんでした。又、バンクの活動に、身近な所から世界中で参加されているお話が聞け、感動しました。(私の主人の母)
- ・「意気が合っていますね!有難うございました。(最前列で熱心に聴き入っていたピアノ教師Uさん。嬉しそうに受付のボランティアにお礼を言って帰られました。)

最初のモーツァルト「ディヴェルティメント」から聴衆は引き込まれ、続く、西澤氏のピアノ三重奏曲では、作曲したご本人がステージに紹介され、拍手喝采を浴びました。チャイコフスキーの「偉大な芸術家の思い出に」は、悲痛な叫びが聞こえてきそうな第1楽章、第2楽章は、ロマンティックなテーマから多様なバリエーション、華やかなフィナーレへと展開し、譜めくりさせて頂いて、心臓がドキドキしました。

暦の上ではもう冬。北国の暖炉のように私たちの身も心も暖めてくれたサクト・フローリアントリオの皆さん、どうもありがとうございました!!今年のコンサートは『平和のメッセージ』までも伝わって来るようでした。

今後の主なコンサートとスケジュール



12月7日(金) 小澤洋介チェロリサイタル

小澤洋介、ティム・レーヴェンスクロフト デュオリサイタル
シューマン & ブラームス

- ・ブラームス：チェロソナタ第1番
- ・シューマン：幻想小品集
- ・シューマン：5つの民謡風の小品集
- ・ブラームス：チェロソナタ第2番

東京オペラシティ リサイタルホール 7pm 開演 ¥5,000
お問合せ：ハラミュージックエンタープライズ TEL.03-3587-0218

12月15日(土) 小澤洋介、三戸素子デュオ

小澤洋介、三戸素子 デュオコンサート

- ・コダーイ：二重奏曲 作品7 ほか

山梨、富士吉田 ナノリウム 6 pm 開演 前売 ¥3,000
お問合せ：予約制 TEL.0555-24-2938 当日 ¥3,500

1月27日(日) 東京文化会館室内楽シリーズ

クライネス・コンツェルトハウスOp.12

- ・ハイドン：弦楽四重奏曲
「十字架上のキリストの七つの言葉」

出演：ヴァイオリン：三戸素子 / 山田耕司 / ヴィオラ：二宮隆行 / チェロ：小澤洋介

ゲスト：朗読、蜷川有紀

東京文化会館 小ホール 2pm 開演 ¥4,000

お問合せ：ハラミュージックエンタープライズ TEL.03-3587-0218
クライネス・コンツェルトハウス事務局 FAX.042-945-6329

4月14日(日) 三戸素子ヴァイオリンリサイタル

三戸素子、クリスティーナ・ヴェナー デュオリサイタル
モーツァルト、シューベルト、バルトーク

東京文化会館 小ホール 2pm 開演